

新 刊 紹 介

□ JENSEN, A. & STEIN, J. R. ed. **Proceedings of the Ninth International Seaweed Symposium.** i-xviii+634 pp. Science Press, Princeton. \$ 42,00.

第9回国際海藻学会議の講演集である。1977年8月にアメリカ、カリフォルニア大学(サンタバーバラ)で行われた第9回国際海藻学会議は参加国42, 参加登録者757人に及び、講演数も特別講演3つを含み500以上に達し、海藻学会議始って以来の最大のものであった。講演は分類、分布、形態、細胞、生理、生態、化学、利用、増殖、環境汚染等、およそ藻類を対象とするあらゆる学問分野を包括したが、この講演集はそれらの中から、この会議本来の目的である海藻の人間生活への利用、人類への直接的な貢献に最も関係の深い論文61篇を掲載している。内訳は特別講演3の他に、一般講演から選ばれた生物学関係29, 化学関係18, 利用関係11篇である。掲載論文の著者名の中には本学会員の三本菅善昭, 大野正夫, 廣瀬弘幸, 吉田忠生, 秋山和夫, 大田啓一, 山本俊夫, 鳥居茂樹, 川嶋昭二, 西出英一, 西澤一俊等の諸氏を見ることができる。

特別講演は、1) J. H. RYTHER 博士(アメリカ, ウズホール海洋研究所)による海藻の人工養殖系の話、2) A. JENSEN 教授(ノルウェー, トロニエム大学)の海藻の工業的利用の過去・現在・未来、3) M. S. DOTY 教授(アメリカ, ハワイ大学)の海中農業についてである。1)は、カラゲenanや寒天原料としての海藻の養殖、家畜排泄物処理のための海藻の養殖、メタンなど燃料エネルギー源としての海藻の養殖の現状がアメリカのウズホールとフロリダにおける実際的な研究を中心に語られる。2)では、題目が示す通り、どれ程の量のナトリウム, ヨード, カリウム, 寒天, カラゲenan, フルセラランなどが過去に海藻から得られたか、現在のアルギン酸, 寒天, カラゲenan, フルセララン, ノリ, ワカメ, コンブなどの生産量と消費量はどうなっているか、それらのほかに将来期待される海藻からの新しい産物にはどのようなものがあるか、そしてそれらの見通しはどうかなどが語られる。3)では、教授が直接指導されているフィリッピン島のキリンサイの海中栽培を中心に海中農業の現状と将来のあり方と問題点などが要領よくまとめられる。いずれも世界的な規模で海藻を人類に役立たせたいとする意欲的な内容であるが、掲載された他の一般講演の内容もまたそうした方向を目指すものである。われわれ日本人は、ともすると、海藻の利用や増殖に関する限り、外国に学ぶべきものはないと思いがちであったが伝統的ともいべきアサクサノリを初めとする2, 3の海藻を除くと、諸外国に学ぶべきことの方が多くなってしまったことを痛感させられる。

なお、すべての講演(正規の締切日までに受け付けられた)453の要旨はアメリカ藻類学会の機関誌 *Journal of Phycology*, Vol. 13 (1977年6月)の Supplement として集録されてある。

(筑波大学・生物科学系 千原光雄)